

チヨースーのimaginationについて*

—特にnatureとの関わりにおいて—

地 村 彰 之

【キーワード】 チヨースー・imagination・nature

はじめに

グレイ (2003) によると、中世におけるimaginationは、‘creative imagination’ (つまり、最高位における精神の創造的能力、詩的な創造的天賦の才能) というロマン主義の概念ではない。¹⁾ チヨースーはボエティウスの一節の翻訳において、imaginationのことを次のように議論する。

“Certes resoun, whan it lokith any thing universal, it ne useth nat of ymaginacioun, nor of wit; and algatis yit it comprehendith the thingis ymaginable and sensible. For reson is she that diffynyscheth the universel of here conceyte ryght thus: man is a resonable two-foted beest. And how so that this knowynge is universel, yit nis ther no wyght that ne wot wel that a man is a thing ymaginable and sensible; and this same considereth wel resoun; but that nis nat by ymagincioun nor by wit, but it lookith it by resonable concepcioun. Also ymaginacioun, albeit so that it takith of wit the bygynnynges to seen and to formen the figures, algates althoughe that wit ne were nat present, yit envyrowneth and comprehendith alle thingis sensible, nat by resoun sensible of demynge, but by resoun ymaginatyf.” (Boece 5. pr 4. 191-209) ここで、人間は ‘sensible’ ‘ymaginable’ ‘resonable’ であると言っている。人間は ‘wits’ つまり五感によって知覚する。そしてまた ‘ymaginacioun’ を授けられている。また、他の動物と違って、理性の力を与えられている。imaginationによって、過去にみたもののイメージを呼び起こし、記憶していることを組み合わせることによってイメージを作り出すことが出来る。チヨースーはかつて盲目の人でさえ見ることが出来る ‘eyes of the mind’ のことについて触れている。

(cf. ハムレットもin my mind's eyeを使っている。) 想像力は、ものの姿を物質から切り離すことによってその姿を保存するので、五感より高いところにある能力としてみなされた。²⁾ 本論では、imaginationを上述のように位置づけて、中世の時代、特にチヨースーの作品に見られるimaginationの問題について論じる。

1 チヨースーのimagination

チヨースーは、imaginationによって過去にみたもののイメージを呼び起こし、記憶していることを組み合わせることによって、新たなイメージを作り出したと考えられる。中世的いやチヨースー

サー的imaginationと考えられるのは、直喩と隠喩などの比喩表現や自然描写の中に表されることである。例えば、トロイラスがクリセイデの居なくなった館について述べる冬の描写が印象的である。³⁾

第5巻におけるクリセイデの館の描写は、一抹の期待が感じられるところもあるが、最終的にはトロイラスの絶望と繋がっていく。その場面でのimaginationの働きを以下のように要約することが出来る。

1. トロイラスがクリセイデのいない館を見る。(具体的なもの)
2. クリセイデのいない館は主のいない館である。(imaginationが働き始める)
3. トロイラスは、かつて楽しかったときの彼女の姿を思い巡らす。(imagination)
4. 主のいない館はクリセイデの亡骸のようである。(imaginationの結果、新しい形態を作る)

Than seide he thus: “O paleys desolat,
 O hous of houses whilom best ihight,
 O paleys empty and disconsolat,
 [.]
 “O paleis, whilom crowne of houses alle,
 Enlumyned with sonne of alle blisse!
 [.]
 Yet, syn I may no bet, fayn wolde I kisse
 Thy colde dores, dorste I for this route;
 And farwel shryne, of which the seynt is oute!”
 [.]
 And at that corner, in the yonder hous,
 Herde I myn alderlevest lady deere
 So wommanly, with vois melodious,
 Syngen so wel, [. . .] (5. 540-78)

この描写は過去の栄光と著しい対照をなす。トロイラスが現在の悲惨な場面を言葉で表そうとすればするほど、過去の輝かしい華やかな時間がよみがえってくる。そして、この情景の冷たさはトロイラスの絶望的な心理状態を示している。“disconsolat”(OEDの初出例で“Of places or things: causing or manifesting discomfort; dismal, cheerless, gloomy”を意味する。)に表されているように、クリセイデの館は主がいないため陰鬱な状況にある。トロイラスの心は凍りついたようで、館の戸口の“colde”な様子がそれを象徴している。⁴⁾ “best ihight”(最高の名前と呼ばれた)や“enlumyned

with sonne of alle blisse” (あらゆる至福の太陽で照らされた) は過去の輝きである。トロイラスは “in the yonder hous” と第5巻で繰り返し使われる特定の場所を示す言葉が続けながら、過去の喜びと光を思い浮かべる。そして、次のスピーチに続く。“[. . .] and in that yonder place / My lady first me took unto hire grace” (5. 580-81) (あの向こうの場所で私の婦人ははじめて私に好意を示されたのだ。) かくして、クリセイデの館の描写はトロイラスの悲しい心を映し出していた。

しかし、中世的いやチョーサー的imaginationと言えるのは、地上の館から天上の館へと視点が移動していくことである。「ティンタン寺院の詩」よろしく、この描写を詩的想像力の源泉として、新しい表現を求めていくだけであれば、14世紀のチョーサーも18世紀のロマン派の詩人たちとなんら違う所はなかった。しかし、中世人としての宿命は、最終的な救いを天上の世界に求めていたことであった。トロイラスには天上の館があった。第5巻の最後で、トロイラスが天に召されていくとき、自然の調和の取れた光を浴びる。彼の周りには様々な惑星を鳥瞰しながら、地上の館で行われた “blynde lust” を客観的に見ることが出来る館に落ち着くことになった。

And whan that he was slayn in this manere,
His lighte goost ful blisfully is went
Up to the holughnesse of the eighth spere,
In convers letyng everich element;
And ther he saugh, with ful avysement,
The erratik sterres, herkenyng armonye
With sownes ful of hevenyssh melodie.

And down from thennes faste he gan avyse
This litel spot of erthe that with the se
Embraced is, and fully gan despise
This wrecched world, and held al vanite
To respect of the pleyn felicite
That is in hevene above; and at the laste,
Ther he was slayn his lokyng down he caste,

And in hymself he lough right at the wo
Of hem that wepten for his deth so faste,
And dampned al oure werk that foloweth so
The blynde lust, the which that may nat laste,

And forth he wente, shortly for to telle,

Ther as Mercurye sorted hym to dwelle. (5. 1807-27)

この描写全体が偉大なる自然のすばらしいパノラマを生み出し、人間・自然・神の階層的な秩序を示している。このような壮大な描写を、チョーサーは18世紀的な詩人の創造的能力で作りに上げたというより、ボッカチオの『イル・フィロストラート』を始めいろいろな原典に通じていたから完成することができたのであろう。“Chaucer surely knew all these sources directly.”⁵⁾と説明されていることから、記憶を大事にしてそれを自分の作品中に再現しようとしたことがわかる。記憶に重きを置く *imagination* の重要性を十分に理解して、それを詩作に用いようとしたのであろう。チョーサーは記憶から生きた場面を作り上げることを試みた。それはC・S・ルイスの言う“*a realising imagination*”⁶⁾ではなかろうか。

2 OEDとMEDにおける *imagination* の意味について

チョーサーは *imagination* という言葉をどのようなコンテキストで用いたであろうか。チョーサー及びその時代に使われていた *imagination* には、OEDの4. b.にあるロマン派的な最高の位置での精神の創造的な機能、新たな著しい知的な概念を形作る力、詩的天才という意味は存在していない。‘*productive imagination*’「生産的想像力」という能力はなかった。むしろOEDの1と2にあるように“*vain*”“*false*”“*euyll*”という形容詞に修飾されることからして、それほどよい意味で使われていないことも多かった。そして、OEDの3にあるように、‘*reproductive imagination*’「再生的想像力」とよばれる想像力が、中世の詩人にとっては重要であった。五感に存在しない外界の物やそれに関係した物のイメージや概念が形成される精神の機能、しばしば記憶を含んでいるのである。この能力をチョーサーは理性と五感の間に位置づけたのであった。

OEDの定義について以下にあげる。

1. 五感に実際存在しないものの精神的概念を想像したり形成する行為、この過程の結果、精神的なイメージまたは考え（しばしば、概念が物事の現実に一致しないという意味合いをよくともなう、ここで“*vain (false, etc.) imagination*”の表現が使われる。）a1340 Hampoleから1896までの用例がある。
2. まだ存在していない行動や出来事を頭の中で考えること、計画することや考案すること、工夫・考案・プラン・計画・プロット、空想的計画。聖書で使われる古語は別として、廃語。c1385 Chaucer L.G.W.の“*euyll ymagynacyoun*”から1809までの用例がある。
3. 五感に存在しない外界の物やその（お互いのまたは主題への）関係した物のイメージや概念が形成される精神の機能、ここではしばしば記憶を含んでいる。（時には‘*reproductive imagination*’「再生的想像力」とよばれる。）(1340-1859)

4. 精神が、外界の物体から由来するものを越えて、概念を形成する力。(‘productive imagination’「生産的想像力」) a. 空想的思考の働き、空想。(c1386-1834)
 - b. 最高の位置での精神の創造的な機能、新たな著しい知的な概念を形作る力、詩的天才。(1509-1871) シェイクスピアの用例も含まれている。
5. 想像に従事するときの精神または精神の領域、ここから精神の一般的作用、考えること、考え・意見。今日ではまれ又は廃語。(c1384-1662)

次にMEDの定義もOEDの1～5までの定義とそれぞれ呼応している。MEDの定義1はOEDの1・3の定義に相当する。⁷⁾ MEDの定義2はOEDの4の定義に相当する。⁸⁾ MEDの定義3はOEDの2の定義に相当する。⁹⁾ MEDの定義4はOEDの5の定義に相当する。¹⁰⁾

以上、チョーサーの場合、最高の創造的な精神機能という意味で使われているというよりも、中世の時代重要な働きであった記憶に基づく再生的想像力という意味でimaginationを捉えていたのではなからうか。

3 チョーサーのimaginationと自然描写

以上のように、OEDとMEDにおいてimaginationという語が定義されているが、チョーサー自身そのimagination特に「再生的想像力」を十二分に活用したのは、自然描写においてではなからうか。そして、その描写が聴衆や読者に新たなイメージを想起させてくれる。自然は、物的世界において影響を与えるものとして認識され、あらゆる現象の直接の原因として考えられる創造的な自然界に存在する力である。その力をチョーサーは作品の中で活用している。W・H・ハドソンも、次のようにチョーサーの卓越した自然描写を絶賛している。これは今から40年ほど前に書かれたものであるが、チョーサーの卓越した自然描写についての的を射たコメントをしていると評価されていいのではないか。“A specially charming feature of his poetry is its fresh out-of-doors atmosphere. His descriptions of the country are often indeed in the conventional manner of his time, and his garden landscape and May flowers are to some extent things of tradition only. But he has a real love of nature and particularly of the spring, and when he writes of these, as in the Prologue and the Knightes Tale, the personal accents unmistakable.”¹¹⁾ このような『カンタベリー物語』「序の詩」(I(A) 1-11)における春の生き生きとした描写は、『カンタベリー物語』全体の序として、聴衆・読者にその後のストーリーを期待させる効果を持つ。

『トロイラスとクリセイデ』においても、自然描写は次に生じる登場人物の関わりを期待させるとともに、ストーリーの浮き沈みに大きな役割を果たす。語り手は自然界の物質・植物・動物のすばらしさを描きながら、登場人物を取り囲む優しい雰囲気醸し出している。第1巻の4月の描写、第2巻での5月の描写、第3巻における春と雨の描写、第4巻と第5巻の冬の描写において、チョーサーの想像力は十二分に活用される。描写される自然が、物語の進展と歩調をあわせなが

ら、登場人物の微妙な心理描写と一体となって展開されていく。人物が自然と調和しているときは、万事自然な成り行きに従って物事が進んでいく。しかし、いったん調和が崩れだすと、人間では制御できない力によって支配され、運命に従わざるを得ない状況が作り出される。第5巻では、超自然的な力によって人間は支配されてしまう。自然は人物から離れて存在する。D・テイラーが指摘するように、自然は人間と神の間の中間的な存在である。“In this book, the narrator no longer confined nature to art. He does not limit it to the garden of love; he does not reduce it by personification of love; he does not allude to it to transform death. He writes of it now on the grandest of scales, as the intermediary between man and God, the veil partially hiding the final vision.”¹²⁾ そのため、作品は悲劇に終わってしまうが、自然の威厳は安定したままである。そして、トロイラスは死後、自然と調和を保ちながら昇天していく。トロイラスに対する最後の救いとなる。

And ther he saugh, with ful avysement
 The erratik sterres, herkenyng armonye
 With sownes ful of hevenysssh melodie. (5. 1811-13)

3.1 第1巻でのnature

第1巻では、4月の描写が新たな始まりを期待させる。

And so bifel, whan comen was the tyme
 Of Aperil, whan clothed is the mede
 With newe grene, of lusty Veer the pryme,
 And swote smellen floures white and rede, (1. 155-58)

語り手は4月を客観的に描写している。テイラーはその描写を“purely conventional,”¹³⁾ というが、春の描写がこの作品における起こる出来事を前景化していることを忘れてはならない。春がやってきた。‘Veer’ (OEDの初出例で“the season of spring; spring-time”を意味する。)は“lusty” (=“pleasant, delightful”)と表される。花は『カンタベリー物語』の「序の詩」にあるように、“white and rede”である。野原は生命に満ち溢れている。何か良いことが起こりそうである。そのように想像力を豊かに掻き立ててくれる。

3.2 第2巻でのnature

第2巻では5月の描写に変わる。自然描写は第1巻より活気に満ちる。

In May, that moder is of monthes glade,
 That fresshe floures, blew and white and rede,
 Ben quike agayn, that wynter dede made,
 And ful of bawme is fletyng every mede, (2. 50-53)

反復される/m/と/f/の音は自然のきれいな動きを象徴している。固有名詞‘May’は擬人化されている。¹⁴⁾ 咲く花は第1巻で使われた形容詞“white”と“rede”に加えて、(「序の詩」の近習に見られる“as fressh as is the month of May”に繋がるものである)“fresshe”と“blew”が使われ、多彩になる。語り手は活気に満ちた雰囲気を作り上げ、トロイラスとクリセイデの恋の沙汰が順調に進んでいくことを想像させてくれる。すばらしい自然描写が恋する人たちを豊かにしてくれる。

輝きを示す自然界のものに目を向けよう。‘Phebus’、‘sonne’、‘moone’などである。特にフォイボス神は最高の威厳のある輝きと品格を表す“gold-ytressed”と“laurer-crowned”によって修飾されている。

Whan Phebus doth his bryghte bemes sprede
 Right in the white Bole, it so bitidde,
 As I shal synge, on Mayes day the thrydde, (2. 54-56)

But right as floures, thorough the cold of nyght
 Iclosed, stoupen on hire stalke lowe,
 Redressen hem ayein the sonne bright,
 And spreden on hire kynde cours by rowe, (2. 967-70)

最初の例では、5月3日のことであるが、太陽神フォイボスが輝いた光をあたりに広げるとき、たまたまパンダルスの恋の計画が進行していくことを示している。¹⁵⁾ 太陽の光がパンダルスの仕事に協力するようである。Taurus (牡牛座) に付いている“white”は太陽の輝きと歩調をあわせるだけでなく、『変身譚』にあるジュピターがエウロペを奪ったときの白い牛の姿を連想させる。¹⁶⁾ 二つ目の用例では、二人の主人公の恋の展開が順調に進み、トロイラスが幸せな気持ちになっていることを示している。当然第3巻でも自然界の光輝いた状態は見られるが、そこでは愛と美の女神ヴィーナスの至福の状態とつながっている。

3.3 第3巻でのnature

第3巻における春と雨の描写は、二人の心が結ばれていくので重要な役割を果す。特に序の歌では、自然がヴィーナス神と調和している。

But right as thise holtes and thise hayis,
 That han in wynter dede ben and dreye,
 Revesten hem in grene when that May is,
 Whan every lusty liketh best to preye;
 Right in that selve wise, soth to seye,
 Wax sodeynliche his herte ful of joie,
 That gladder was ther nevere man in Troie. (3. 351-57)

ここでは、自然描写がトロイラスの心理状態を描出している。クリセイデの気持ちがわからずどうなのかと悩んでいるときは冬の描写が使われ、後に彼女の愛を勝ち取ったとわかったときには、生き生きとした春が訪れてくる。すばらしい夏の日にも繋がっていく。“For I have seyn of a ful misty morwe / Folowen ful ofte a myrie someris day; / And after wynter foloweth grene May;” (3. 1060-62)

第3巻における雨の描写は忘れることが出来ない。雨は、光り輝く太陽の表現と対照をなし、二人の愛を包みながら結実させる働きをする。

Now is ther litel more for to doone,
 But Pandare up and shortly for to seyne,
 Right sone upon the chaungynge of the moone,
 Whan lightles is the world a nyght or tweyne,
 And that the wolken shop hym for to reyne, (3. 547-51)

The bente moone with hire hornes pale,
 Saturne, and Jove, in Cancro joyned were,
 That swych a reyn from heven gan avale,
 That every maner womman that was there
 Hadde of that smoky reyn a verray feere; (3. 624-28)

And seyde, "Lord, this is an huge rayn! (3. 656)

The sterne wynd so loude gan to route
That no wight oother noise myghte heere; (3. 743-44)

ここでの自然現象は、クリセイデをパンダルスの家に留めておくために大事な役目をする。雨はクリセイデにとって不運なことであろうが、トロイルスとパンダルスの二人にとってはまさに運がいいことになる。(形容詞の“bente”はOEDの初出例で“1. Constrained into a curve, as a strung bow; curbed, crooked, deflected from the straight line,”を意味し、“smoky”もOEDの初出例で“2. Of vapour, mist, etc.: Having the character or appearance of smoke; resembling smoke; smoke-like.”を意味している。) このように、パンダルスの計画は雨という自然現象と歩調をあわせて順調に進んでいく。

雨もそうであったが、『トロイルスとクリセイデ』のような心理的に深みのある作品では白黒のような明白な区別方法は必ずしも適応できない。つまり、トロイラスとクリセイデが夜二人の愛を確かめ合うときは、昼と夜の価値が逆転してしまう。自然が二人に助けの手を差し伸べるように見えるが、実際は助けることはことはない。それで二人とも自然が作り出した昼と夜に不満の気持ちを告げるのである。最初に、語り手は二人の幸せな夜を“blisful”を用いながら述べる。“O blisful nyght, of hem so longe isought, / How blithe unto hem bothe two thow weere!” (3. 1317-18) 二人は楽しい夜を過ごすのであるが、夜に対しても昼に対しても不満を述べる。次の引用はクリセイデの苦情の言葉である。

“O blake nyght, as folk in bokes rede,
That shapen art by God this world to hide
At certeyn tymes wyth thi derke wede, (3. 1429-31)

Thow rakle nyght! Ther God, maker of kynde,
The, for thyn haste and thyn unkynde vice, (3. 1437-38)

“blake”や“rakle”にあるように、すばやく過ぎ去っていく夜に対して嘆いているのである。これはある意味で当然といえる。それも夜はもちろん“blake”であるからである。一方、トロイルスはその後に訪れる“day”に対して不満を言う。

“O cruel day, accusour of the joie
That nyght and love han stole and faste iwryen,
Acorsed be thi comyng into Troye,

For every bore hath oon of thi bryghte yen!
 Envious day, what list the so to spien? (3. 1450-54)

"Allas! what have thise loveris the agylt,
 Dispitous day? Thyn be the peeayne of helle! (3. 1457-58)

トロイラスは愛するクリセイデとずっととどまっていたいので、“cruel” “envious” “dispitous”な存在であるdayを呪うのである。(形容詞の“dispitous”はOEDの初出例で“2. Cruel; exhibiting ill-will, or bitter enmity, malevolent”を意味する。)このような表現はこの後まで続いていく。“cruel day” (3. 1695) “Callyng it traitour, envyous, and worse,” (3. 1700) (朝が来たとき、パンダルスが陽気に楽観的に次のように言うのは、トロイラスとは対照的である。“How stant it now / This mury morwe?” (3. 1562-63))

3.4 第4巻でのnature

第4巻の自然描写は少ない。それだけ第3巻までの豊かな自然が人物たちから遠ざかってしまったことを間接的にいっているのかもしれない。

And as in wynter leves ben biraft,
 Ech after other, til the tree be bare,
 So that ther nys but bark and braunche ilaft,
 Lith Troilus, byraft of ech welfare,
 Ibounden in the blake bark of care, (4. 225-29)

ここでは語り手がどの季節を述べているのか定かではないが、たとえ季節が春であるとしても、上の引用文中の“til the tree be bare”と“the blake bark of care”からすると、冷たい厳しい冬を連想する。トロイラスに冬が訪れた。このように第4巻で自然の調和が乱されると、その生き生きとした愛らしい姿は冷たくて厳しい冬化粧を帯びる。

3.5 第5巻でのnature

しかし、第5巻では、自然は見事な美を見せてくれる。第5巻の冬の描写は、光り輝くフォイボス神と西風のゼフェロス神とともに、自然界の新たな再生を感じさせる。

The gold-tressed Phebus heighe on-lofte

Thries hadde alle with his bemes cleene
 The snowes molte, and Zepherus as ofte
 Ibrought ayeyn the tendre leves grene, (5. 8-11)

ここでは、自然の美がもう一度描写される。テイラーの言葉を借りると “the imagery here is epic, presenting time's relentless course, and although the passage of time portends sorrow, nature maintains its beauty” であり、その引用文は “the impression of an eternal order, benevolent and beautiful although distant from man.”¹⁷⁾ を生み出すのである。永遠の自然の美がここで表される。自然は不動でじっとしているからこそ、人物たちの運命を無視して超然と自らの存在を保っているのである。自然が威厳を示せば示すほど、トロイラスの悲惨な状況を感じさせる。もちろん、このことはクリセイデにもあてはまる。しかし、皮肉なことに彼女は惨めであるにもかかわらず、その美しい姿がディオメディを虜にしてしまう。自然は人物から距離を置くように見えるが、実際は人物と深く繋がっていることがわかる。

第5巻の最後でトロイラスが昇天していくとき、自然の調和の取れた光を浴びることになる。悲劇の主人公であるトロイラスへの最後の救いとなる。第4巻で自然から突き放されたトロイラスが、最後に彼の周りにある様々な惑星を鳥瞰的に眺める。宇宙の大自然を楽しむのである。

And ther he saugh, with ful avysement,
 The erratik sterres, herkenyng armonye
 With sownes ful of hevenyssh melodie.
 And down from thennes faste he gan avyse
 This litel spot of erthe,... (5. 1811-15)

ここで “the erratik sterres” は “the (seven) planets”¹⁸⁾ である。（“erratik” はOEDの初出例で “A. Wandering; prone to wonder. 1. First used in certain special applications: a planet. obs.” を意味する。）7つの惑星を通過しながら、小さな地球 “this litel spot of erthe” を見下ろす。ここでの自然描写全体が大自然の大きなパノラマを作り出し、人間・自然・神の階層的な秩序を示している。

おわりに

以上、チョーサーのimaginationについてnatureの描写を中心に調べてきた。それは人物の微妙な気持ちを映し出しており、特に輝いた太陽は陽気な心理状態を示している。運命の雨は物語を最高潮に持ち上げる。人間と館を支配する雨は、トロイラスとクリセイデの愛の手助けをする。植物も作品の前半において二人の愛の調和の取れた発展に大いに寄与する。しかし、二人が自然に

逆らうとき、自然は二人を助けない。自然の秩序は破壊されそうになり、厳しい冬と人間の冷たさを感じさせる。ただし、最後に救いがある。最終的に黄金に光を放つフォイボス神が自然の調和への回帰を示している。人物の悲劇にもかかわらず、自然は超然としている。このように、『トロイラスとクリセイデ』において、チョーサーは、伝統的な記憶を大切にし、imaginationを駆使して、natureの中に人物の行動と心理状態を忠実に生き生きと映し出すことに成功したと言える。それが“a realising imagination”ではなかろうか。

注

*本稿は、中国四国イギリス・ロマン派学会第二十六回大会（平成十六年六月十二日（土）、於、KKR広島）シンポジウム「想像力—四詩人の視点から」において、口頭で発表した論文に加筆したものである。

- 1) Hawes (Henry VII時代の詩人) がチョーサーの詩的想像力について述べる時（‘upon hys ymaginacyon / He made also the tales of Caunterbury’）、シェークスピアのテセウスが ‘forms of things unknown’ を ‘bodying forth’ するimaginationとそれらを ‘shapes’ に変える詩人の筆力について話すとき（MND 5. 1. 12 ff.）、まだ知覚と知識における伝統的な中世的心理が読み取れるという。（Douglas Gray, *The Oxford Companion to Chaucer* (Oxford: OUP, 2003), 244.）
- 2) 中世の時代、fancyはimaginationとほぼ同義に使われていたという。つまり、詩人が修辞法を用いるような芸術的表現において概念を表す力、存在していないもの、知られていないもの、経験されていないものに芸術的な形式を与える力を示していた。中期英語のfantasyは、“to make visible” or “present to the mind” を意味するギリシア語のphantázeinから由来し、“imagination” “mental image” を意味した。英国では、imaginationにcreativeな要素を認め、広い重要な役割を与えた。ロマン派の詩人には、imaginationは創造性（creativity）と関わる能力・精神的機能や形を与えたり統合したりする力になった。一方、fancyはimaginationに依存していて劣っていて、ただ単に連想的（“associative”）に過ぎないものとなってしまった。（*Britanica* 2003）
- 3) この箇所をWordsworthは翻訳をしているので、彼の想像力にぴったりあったといえるかもしれない。ただし、Wordsworthにとってはそこまでであり、その館を描写する能力そのものに、‘creative imagination’（つまり、最高位における精神の創造的能力、詩的な創造的天賦の才能）を見ていたのであろう。
- 4) Windeattによれば、*Troilus and Criseyde*の第5巻551行目から553行目まで*Il Filostrato*に呼応するところがない。（B. A. Windeatt, ed. *Troilus and Criseyde: A new edition of ‘The Book of Troilus’* (London & New York: Longman, 1984), 474-75.）
- 5) L.D. Benson, ed. *The Riverside Chaucer* (Oxford: OUP, 1987), 1057.

- 6) C.S.Lewis, *The Discarded Image* (Cambridge: CUP, 1964), 206.
- 7) “1. (a) The faculty of forming mental images from sense data and of retaining them either immediately or when recalled from memory, (b) more narrowly: the faculty of receiving images from commune wit [i.e. communis sensus; see quot. Pecoock Donef] and or of retaining them; (c) the power of forming mental images of things not experiences, e.g. of future or past events, of spirits, etc.; also, the location of the images so formed; (d) an image or though resulting from the operation of this faculty, (e) the operation of this faculty.” Chaucerの用例は(c) Chaucer Bo.5.pr.4.230 (d) Chaucer Bo.3.pr.1.42; Bo.3.pr.3.3; Bo.5.m.4.48のようにBoeceから引用されている。
- 8) “2. (a) The experiencing of illusions; also, a fantasy, delusion, presumption, dream; (b) med. a visual illusion; also, the initial stage of cataract when such illusions are experienced; (c) assumption, opinion, conjecture.” Chaucerの用例は以下の通りである。(a) Chaucer CT. Mil.A3612; Chaucer Bo.3.pr.10.12; (c) Chaucer CT. Kn.A1094; Chaucer HF 728
- 9) “3. (a) Planning, scheming, devising; also, a plan, scheme, device, intention; (b) forethought; heigh~, divine foreknowing; (c) mental ability; inventiveness, ingenuity, craftiness; (d) lying invention, fabrication, falsehood; (e) a mechanical device.” Chaucerの用例は以下の通りである。(a) Chaucer LGW 1523;(b) Chaucer CT. NP.B.4407;(c) Chaucer CT.Sum.D.2218;(d) Chaucer LGW Prol.(1)355
- 10) “4. A thought, cogitation, idea.” Chaucerの用例は次の一例である。Chaucer BD14
- 11) W.H.Hudson, *An Outline History of English Literature* (London, 1966), 26.
- 12) D.Taylor, *Style and Character in Chaucer's Troilus* (Michigan, 1969), 254.
- 13) Taylor, 244.
- 14) 名詞 ‘May’ はOEDの初出例である。
- 15) しかしながら、威厳のある自然が第5巻で3回姿を見せる。(5.8-11; 5.1016-17; 5.1107-9)
 “the gold-tressed Phebus” という表現は太陽の恒久的な性質を示す。この性質は時がたっても変化しない。そして、それは惑星の ‘Venus’ にも適応される。OEDは次のような定義を与えている。“5. *Astr.* The second planet in order of distance from the sun, revolving in an orbit between those of Mercury and the earth; the morning or evening star.” その惑星は女神であるヴィーナスを連想させる。Phebusには “laurer-crowned” という形容詞も使われている。
- 16) Benson, 1031.
- 17) Taylor, 252-54.
- 18) D.S.Brewer and L.E.Brewer, ed. *Troilus and Criseyde* (abridged)(London: Routledge & Kegan Paul, 1969), 128.

On Chaucer's Imagination:

With Special Reference to Nature

Akiyuki JIMURA

According to Douglas Gray's *The Oxford Companion to Chaucer* (2003), 'imagination' in the Middle English Period is not 'creative imagination,' though it is semantically connected with a creative ability in Romanticism. In *Boece*, Chaucer considers and classifies 'imagination,' making use of the following adjectives: 'sensible,' 'ymaginable,' and 'resonable.' Human beings perceive things by the faculty of their 'wits' or five senses. And they have 'imagination.' They are also given 'reson,' which the other animals do not possess. They can create a new image, combining old memories and reviving things which they saw in the past. Chaucer uses the notion of 'eyes of the mind,' by which even blind persons can see things. 'Imagination' is regarded as an ability higher than the five senses, because it preserves the forms of things, separating them from the materials of the real world.

This paper discusses Chaucer's imagination, investigating the description of nature in *Troilus and Criseyde*. The description of nature plays an important part in Chaucer's works, and is always connected with the state of mind of the characters. In keeping with the development of the stories, it reflects the subtle psychological attitude of the characters. When they are in harmony with nature, they proceed favourably, according to how the situation develops. However, when they are out of harmony with nature, they are obliged to obey an uncontrollable power such as Fortune.